

年明け最初の講義は宗教学だった。前で喋っている教授はゾロアスター教における何かの研究の権威らしく、彼の講義は内容が度々そちら方面に飛ぶことで有名である。今もヨーロッパの宗教革命の話をしていたと思ったら、ゾロアスター教における善悪二元論について熱く語っている……いつ変わったんだろう。

「この前あの人に質問しに行ったら、これ貰っちゃった！ 結構面白いぞ」

吉野は自慢げに一冊の本を取り出した。「アヴェスター——ゾロアスター教の聖典だ。それにしても、こいつに質問されるとは教授も災難である。以前吉野が質問をしているのを見たことがあるが、疑問と自分なりの解釈をマシガンのように相手に浴びせかけて説明の暇を与えず、最終的に自己完結して立ち去った時には実に二時間が経過していた。本人は真剣なのだろうが。教授は延々と話を続ける吉野を黙らせるためにこの本を与えたのだろう。」

吉野は私の友人である。体の成分の七十%が好奇心でできており、「面白ければええじゃないか」を合言葉にあらゆることに首を突っ込んで厄介事を引き起こす。こいつのせいで私達が異世界へ飛ばされるというファンタジー体験をしたこと多数。頼むから私を巻き込まないでくれ……。

「めっちゃカッコいいやつ見つけたんだよ。これこれ！」

一番後ろの席を取ったのは講義中に思いきり話すためか。私のため息をついて開かれた聖典の挿絵に目をやった。そこには、一頭の竜が描かれている。ごつごつと鱗のついた蛇のような胴、ユウモリのような形の巨大な翼、そして鋭い牙を持つ凶暴そうな三つの頭。

「なんだよこれ」

「アジ・ダハーカ——悪神アーマンが創造した最も怪物的な生き物さ。性格は執念深くて残忍。勇者が退治を試みたが、結局神の力を借りて山に幽閉することしかできなかった、というエピソードがある」

吉野は興奮気味に語ると、聖典を開いたままもう一つの本を取り出した。「王書——古代イランの諸王列伝だ。日本でいう古事記のよいうなものらしい。」

「これも貰った。イランもゾロアスター教だからって。こっちにも良いのがいるんだよ」

次に見せられたのは、山の上で大きく羽を広げる鷲か鷹のような鳥の挿絵だ。

「霊長シームルグ。知恵と穏やかさを持ち、人語を理解する神の使い。羽には治癒能力もあるとか」

先ほどの恐ろしそうな見た目の竜よりは神々しいこちらの方が私の好みだ。そう思ってじっと挿絵を見てみると、急にシームルグと目が合ったような気がした。目をこすりもう一度見る。小さいが力のある目がぎよろりとこちらを見つめていた。

「どうした？」

吉野が本を覗き込む。こいつの表情で、これが気のせいではないことが分かった。もう一度見ると、本の中のシームルグは瞬きをした後、突然大きく羽ばたいた。と同時に急激に引き込まれる感覚に襲われる。

「ちょ、ちょっとよく見せて」

謎の感覚のせいで私は吉野の勢いに抵抗できず、あっさりと押しつけられてしまった。勢い余った吉野は持っていた「アヴェスター」を「王書」の上に取り落とす。その瞬間景色が目まぐるしく変化した。

そして気づけば、私達は硬い地面に向かって落下していた。

強く体を打つ。このことを想定してあらかじめ後頭部を手で保護していたが、それでも衝撃はあまり変わらない。やれやれ、と立ち上がろうとすると間をおかずに

バンッ!!

鈍い爆発音が響き、岩壁全体が弾けた。私達は後方にふっ飛んでいく。状況判断が全くできていないのに……!

突然視界が暗くなった。太い何かが私達の体に巻きつき、勢いよく上昇していく。どうやら死は免れたようだ。安堵の溜息をつく暇もなく、先程の地面に放り出される。

「大丈夫か？」

吉野のそばに行くと、奴は上方を見て固まっている。口が半開きだ。まるで何か恐ろしいものを見たかのような……私は奴の視線の先を見て、息をのんだ。

蛇のような胴、大きな翼、そして、せわしなくうねっている三つの

頭。目は赤く光り、口からは鋭い歯が覗いている——目の前のそれはまさにあの挿絵と瓜二つ。アジ・ダハーカであった。助けを求めように吉野を見るが、恐れのみならず固まって……いや、見惚れているのか？ 黙っていると、真ん中の頭が私達に接近した。

「礼を言おう。長い束縛から我を解放したことを」

地響きのような声は、当然異国の言語を話しているのだろうが、意味は取れる。このようなことは慣れていてためあまり気にしなかったが。

「我が名はアジ・ダハーカ。はるか昔、この山に幽閉された」

彼は忌々しげに尾を山に叩きつけた。まるで積み木の山のようにあっさりと山が崩れる。

「我は、復讐する。我をここに縛った者に」

「えっ……誰……ですか？」

吉野がおそるおそる問うと、六つの目が一斉に奴に集中した。

「我はお前達の望むものを一つ叶えよう。それが礼だ」

質問には答えず、アジ・ダハーカは吉野を覗きこんだ。

「えっ……えーっと、できればその『復讐』に巻き込まれたくないな
くなんてね、はは」

そばで聞いている私には冷や汗ものだ。この竜は今非常に怒っている。そして元々のアジ・ダハーカの性格は「残忍」だった。下手なことを言ったら食われるかもしれない。想像してしまい、震える。

「……いいだろう」

アジ・ダハーカは返答し、私達の体に尾を巻きつける。そして北にある別の山に降ろすと、すぐさま飛び去って行った。

「復讐」に巻き込まれないのは助かったが、こんな山の中で私達は一体どうすればいいというのか。先程の岩山に比べ緑は多く、森が広がっているが、逆に大型の動物がいる可能性があり、夜は結構危険な気がする。更に今までいろいろあって気にならなかったが、非常に寒い。分厚めの上着を着ていても夜の寒さはしのげないだろう。

「なあ、何か食い物持っていない？」

私はポケットに入っていた飴玉を与えて吉野を黙らせると、下山を宣言した。

結局、途中で日が暮れた。所々に現われる谷や川を迂回していたら、下にはなく横に移動していたのだ。山の寒さがじわじわと体温を下げていく。原始的な火の起こし方は一応知識として知っているが、試す気にもなれず私達は一本の木の下で体を休めることにした。

「アジ・ダハーカがいたということは、ここはダマーヴァンド山だな。じゃ、ここはシームルグのいるエルブルズ山脈？」

私は一人で考察している吉野の襟首を掴んだ。

「って、思いがけず解放してしまったが、まずいんじゃないのか!? あいつは悪神が創り出した怪物なんだろう？」

すると吉野は今気が付いた、という顔をした。

「そうだな。ずっと幽閉されていたから奴は、解放されたらその怒りで世界の三分の一を破壊しつくすだろう……と『アヴェエスター』

にはあったけど」

奴の復讐のとぼちちりは世界中に及ぶ、と。私は頭を垂れた。そんなものを外に出してしまったなんて……。

真夜中、すでに夢の世界に旅立っている吉野の横で、私は眠れなideいた。恐怖と寒さのせいである。ガタガタ震えていると、唐突に人の気配がした。草を踏むサク、という小さい音が近づいている。私は急いで立ち上がった。相手には明かりがあるようだ。ぼんやりとした光に眼を凝らす。

「あなた方を探していた」

女性の声。しかしその姿は、一羽の鳥であった。こちらはずいさっき本の中で威光を放っていたシームルグではないだろうか。こちらが答えないでいると、驚のようなその鳥は静かに目を閉じた。

「予想外の事が起きて私の元に呼び寄せることが出来なかった。とにかく私の巣に連れて行こう。話はそれからだ」

鳥はそう言う私と、吉野の襟首を掴んで飛び上った。いきなり首が絞まった吉野はつぶされたカエルのような声を発して目を覚ました。鳥の中では大きい方といっても体長一メートル程であるのに、成人男性二人を軽々と持ち上げてしまうというのはかなりの怪力である。

巣は山頂にあり、数匹の雛が親の帰りを待っていた。鳥は雛に餌をやると私達を降ろす。

「何ということをしてしまったのだ」

霊鳥に事情を説明すると、鋭い叱責の声が飛んだ。私達は思わず首

をすくめる。

「私があなた方を呼び寄せようとした理由は、まさにその『厄介事を引き起こす能力』についてなのだ。それなのにもう問題を……アジ・ダハーカを解放してしまうなんて！」

私達は反論できずにうなだれたままだ。

「良いか、私の仕える神は既にあなた方とその特異な能力をご存じだ。そしてそれが引き起こす破滅も悟っておられる」

『破滅』？」

私は思わず言葉を漏らした。今まで異世界に飛ばされ、そこで世界を救うことはあっても滅ぼしたことなど一度もない。吉野の強運のおかげであるが。するとシームルグは首を振った。

「あなた方は様々な世界に干渉してきた。それによって世界は少しずつ均衡を失っている。短期的に見ると善いことをしたかもしれない。しかし、長期的に見ると……。いずれ全世界は破滅する」

タイムトラベル物の、「未来を変えてしまうため過去の出来事に関わってはいけない」というのと同じことだろうか。いずれにせよ善意の裏で起こっていることに私達はたった今気づいたのだ。

「アジ・ダハーカの件には関わるな。あなた方が死ぬと、それこそ世界に影響する。奴を再び沈黙させることは私と偉大な神の使命だ」
奴に関われば確実に死ぬと、そういうことらしい。すると吉野が空気を読まず質問の手を挙げた。

「気になってたんですけど、完全に倒すことはできないんですか？
神なのに」

「元々、世界は善と悪によって成り立っている。どちらかが欠けるということは『ありえない』。永遠に対立し続けるのだ」

シームルグは答える。これがゾロアスター教の善悪二元論だろうか。私は呑気に考えている場合じゃないと頭を振った。

奴が解放されてすでに数時間が経過している。山の向こうでは一体どのような惨劇が起こっているのか……。

「この巢にいれば安全だ。神の星々に見守られた場所だから。アジ・ダハーカはあなた方が異世界の者であると気づいているだろう。理由は様々だろうが、必ず襲いに来る」

神は悪神との戦いに備え、六百八十万の星を創造したらしい。しかし、戦わずに守られているというのは、何ともどかしい。

シームルグは私達に、絶対に巢から出ないことを約束させ夜が明けける前に南に飛んで行った。巢には三匹の雛が眠っている。

太陽が昇り、そしてまた夜になってもシームルグは帰ってこなかった。雛がピヨピヨと餌を求めて騒ぎ出す。

「おい、鳥が食べられるもの持ってないか？」

吉野がその様子を見ているが、私は食糧庫ではない。しかし放っておくのはかわいそうである。

「探しに行くか。少しなら離れても平気だろう」

私達は巢から出た。約束は覚えていたが、少し甘く見ていたのだ。残念ながら適当な食料は見つからず、巢に戻ろうとしたその時、

「見つけたぞ、異界の者よ」

地響きのような声と荒い息が背後に聞こえた。瞬間で背筋が凍る。

「聖域に隠れていたようだが、一旦出てしまえば意味はない。しかし、獲物を生け捕りにしておくのここはなかなか良い役割を果たしたな。その命、我が体に取り込ませてもらう」

アジ・ダハーカの台詞を最後まで聞く前に巢に飛び乗った。そして三匹の雛を抱える。霊鳥の子供だ、彼らも狙われるだろう。

「逃げるぞ！」

私達は巢を蹴って下に飛び降りた。油断するとこけてしまうので勢いをつけて斜面を駆ける。その後ろから竜が追いかけてきているのを感じた。突然ゴオツという音が聞こえる。

「あいつ、炎を吐いた！」

振り返った吉野が叫ぶ。私は雛をしっかりと抱えたまま吉野の手をつかみ、前に飛んだ。しかし小石に足を取られ、盛大にこけてしまう。

「ふぐっ……」

しばらく呼吸ができないほどの激痛が腹を襲う。雛はこの拍子に落としてしまった。重い体を無理やり持ち上げると、アジ・ダハーカの炎が眼前に迫っている。私はいよいよ腹をくくった。目を閉じてうずくまり、この身を焼く灼熱に備えた。

「……………?」

何も起こらない。痛みを感じない炎なのかと阿呆なことを考えながら顔をあげると、アジ・ダハーカはまだそこにいた。そして、私達を守るように先ほど落した雛が立っていた。

「こしやくな……私の炎を飲み込むだ！」

竜は驚くようなことを言う。

「飲み込む、だって？」

呟いた時だった。遠くから鋭い鳴き声が聞こえると共に一陣の風が吹く。……シームルグだ！ 竜は完全に不意を打たれたらしく、攻撃をもろに受けてしまう。左の頭がえぐられ、力なく垂れる。しかし竜は残り二つがやられる前に逃げ出した。

「待て！」

シームルグはすぐさま追いかける。その時、なぜか私達と雛を掴む。

「落ちなさるな！」

飛んでいると、山をいくつか越えて平原へ出た。途端に視界が赤くなる。地平線までの景色……木も、草も、動物も、砂も、全てが燃えていた。私達は思わず顔をそむける。

「あなた方は私の話を聞いていなかったのか！ 私の子供達まで危険にさらして！ もう私の助けが届かない所にはおかない。分ったな！」

シームルグの剣幕は凄まじいものだった。この状況で、どうして雛達がアジ・ダハーカの炎を飲み込んだなどと言えようか。シームルグは竜を追って最初の山——ダマーヴァンド山——へ向かった。

私達と雛は山の頂上付近の洞窟に放り込まれる。すでに夕方になっていた。

「ここに隠れていなさい。私は奴と戦う」

ダマーヴァンド山の山頂には、通称「硫黄の丘」と呼ばれる場所があるらしい。太陽の光が当たると、硫黄ガスが噴き出すのだそうだ。それでアジ・ダハーカにダメージを与え——せいぜい視覚と嗅覚を一

時的に奪うことしかできないだろうが——弱ったところで封印するという計画らしい。硫黄ガスは人体にも有害なので、私達が昼間外に出るのは危険だ。シームルグは急いで洞窟を出て行った。

「寒いな。ここで夜明けまで待たないといけないのか」

洞窟のあちこちから氷柱が下がっていて地面は薄く氷が張っている。息も白い。吉野は寒さで動きが鈍くなるのを防ぎたいのか、あちこちを走り回ったり飛んだり跳ねたりし出した。

「こいつら、大丈夫かな。霊鳥の子供といえどもアジ・ダハーカの炎を飲んだら？」

雛達は静かに眠っている。私はそつと彼らを撫でた。体温が高いのか、とても温かい。……いや、熱い位だ。雛のいる地面の氷が解けて水になっている。熱でも出たのかと吉野を呼ぶと、彼は雛の腹を指した。中で何かが蠢いているような影が見える。

「もしかして……あ、悪魔的な者が中に？」

吉野はパニックになったのか嘴を無理やり開ける。途端にオレンジ色の炎が飛び出してきた。氷柱が一つ、一瞬にして消える。

「もしかして、腹に貯めてたのか？」

雛は答えるかのように「きゅ」と鳴いた。別に平気そうだ。

「これ、使えるんじゃないか？ 『硫黄の丘』は太陽の光が当たるとガスがでるんだろ。つまり熱があればいいんだ。こいつらの炎を使えば、朝になる前にを攻撃できる」

「いい考えだ。しかし、どうやってそれをシームルグに知らせる？」

吉野はそうか、と俯いた。私は先ほど炎を吐いた雛を抱いて洞窟の

入り口に立った。満点の星空だ。遠くでアジ・ダハーカが残っていた焼け跡が鈍く光っている。

突然、雛が今まで聞いたことが無いような甲高い声で叫んだ。

「おい、見つかったらどうする！」

私は慌てて嘴を塞いで外を伺った。すると、空が動いているのに気づく。無数の星々が北を指して吸い寄せられるように進んでいた。「え……」

雛を見ると、何事もなかったかのようにすやすやと眠りだした。

○

シームルグは星の動きを確認すると、急に攻撃を止める。異世界から来た者達の意志はしっかり届いていた。竜は炎の繩を駆使して鳥の王を絡め取ろうとしている。シームルグは向きを変えると己の巣へ向かった。アジ・ダハーカはそれに気付いていない。攻撃することに夢中なのだ。シームルグは巣の上で止まると、羽を空へ向かって開いた。羽毛が光を放つ。

『神の創造せし星達よ！ 悪神の創造物を圧倒せよ！』

シームルグの頭上へと引きつけられた星々は巨大な一つの光の玉となる。そして隕石の様にアジ・ダハーカへ落ちてゆく。雛の力は弱い。悪神と対峙するための星を十分に操ることは出来なかった。そのため追うことしかできないが、それは確実に竜を「硫黄の丘」へ向かわせた。

○

「は！ 起きろ吉野！」

いつの間にか眠っていた私は強烈な気配に目を覚ました。三匹の雛が私達をつついている。外に出せと激しく喚んでいた。

「危険だが、行こう。どうやらお前の計画通りになりそうだ」

私達は雛を抱え、『硫黄の丘』の上に立った。同時にアジ・ダハカの鋭い目がこちらを捉える。光の玉から逃げるのに必死になっているが、それでも狙いは私達。光の瞬の隙を突いて、三つの眼をぎらつかせながらこちらに突進してくる。私達は硫黄の丘の真ん中に立った。後数秒だ。

「いくぞ！」

竜が『硫黄の丘』の上空に入った瞬間、雛を奴に向けたまま後ろに跳んだ。シームルグが私達を素早くキャッチする。

形容の出来ないほど悲惨な叫び声が夜中の空気を貫く。バランスを失った悪竜は完全に戦闘不能になり、よろよると初めに封印されていた場所へと突っ込んだ。シームルグが羽を一振りし、周りの岩を崩して穴に蓋をする。そして、静寂が訪れた。

朝が来る。シームルグは焼け跡の上空に向かうと、そこで静かに羽を動かした。途端に柔らかい風が吹き、草木が立ち上がり、再び緑を取り戻した。動物達も、眠りから覚めたかのように起き上る。

「治癒能力かあ」

吉野が霊鳥に尊敬のまなざしを向けた。

シームルグは、巢に私達を降ろすと、まずねぎらいの言葉を口にした。しかし、私達が結局関わってしまったことに対しては良く思っていないとも言った。

「この世界の困難は、この世界の者が解決する。そう、あの哀れな子も、救うのは私達だ」

霊鳥の視線の先には、置き去りにされたのか赤ん坊が独り泣き叫んでいた。髪が雪の様に白い。あの子もいつか英雄として世界を守る存在になるのだろうか。

シームルグが飛び上がると同時に辺りの景色がゆがみ始める。私達の、この世界との別れである。すっかり昇りきった太陽の光が、偉大な神の使いを照らしていた。